

1~3面 YWCAの“しあわせ”ストーリー

4~5面 核のない世界を目指して

6面 北の大地ですごす夏休み in はこだて

7面 支え続ける理由~東日本大震災被災者支援~

The Young Women's Christian Association

YWCA

日本YWCAの使命(ミッション)
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

第31総会期主題

平和を実現する人々は幸いである—マタイによる福音書5章9節

日本YWCAビジョン2015

- (1) 非核・非暴力により平和を実現する
- ・平和憲法をまもり、世界に広める
- ・原発のない社会をつくる
- ・市民レベルで東北アジアの信頼関係を築く
- (2) 女性と子どもの権利をまもる
- (3) 若い女性のリーダーシップを養成する

10

OCTOBER 2016

No.734

www.ywca.or.jp



東日本大震災で津波の被害を受けた農家と連携して毎週マルシェを開催。その縁で、バザーで人気の「カレー」に欠かせない玉ねぎも仕入れるようになりました。6kgもの玉ねぎをよく炒めて肉と一緒に煮込んだカレーは、誰にでも食べやすい味わい。(仙台YWCA)



出会いを紡ぐ「ふれあいの居場所食堂 うららかふえ」(京都YWCA)

心尽くしの炊き出し。地域の人に愛されているバザーの定番メニュー。孤独を感じていた母と子が仲間と出会い、みんなで囲む食卓。YWCAと言えば思い出す、手から手へと受け継がれた伝統の味とレシピ…。

大切な味の傍らには、地域と人の素敵なストーリーがあります。世代、性別、国籍、社会的・経済的背景を超えて食卓を囲み、おいしいものを作る、味わう、語る、つながる。それがYWCAの日常の風景です。

今日も、あなたの近くのYWCAで、「おいしいね」「ごちそうさま」が響き、新しいストーリーが生まれているかもしれません。

YWCAと食の素敵な関係

「YWCAってどんなところ？」という問いに、多くのYWCAのメンバーから「多世代、多文化、いろいろな背景の人たちが気軽に集える、温かい居場所」そして、もれなく「おいしい食べものがある！」という答えが返ってきます。全国24地域に

あるYWCAには、それぞれ大切にしている「おいしいもの」があります。自然に囲まれたキャンプで、子どもたちと一緒にワイワイ作った野外料理。留学生が教えてくれる世界各国の故郷の味。多様な背景をもつ人々と共に働くカフェの一品。被災地や路上で生活する方たちのための



毎週金曜日、近隣のホームレスの方たちに温かなスープなどの炊き出しを行っています。2002年に名古屋YWCAの外国人講師を中心に始まった活動で、多世代・多文化のボランティアが集まってコミュニケーションを深めながら調理をしています。(名古屋YWCA)

大切な「あの味」が つなぐ絆

地域と人のしあわせストーリー

stories of bliss

エンパワーするNGO



アデレード だより

オーストラリアのアデレードYWCAで1年間、若い女性のリーダーシップを学んでいる藤原聖帆さんに、日々の学びや発見、思いを綴っていただく連載レターです。



昨年の世界YWCA総会に参加して、言葉では説明できないくらい刺激を受けたことで、私の人生は180度変わりました。国が違えば、抱える問題も異なる。だけど、若い女性がリーダーシップを発揮できるように育成することは共通のビジョンであり、総会を通して私が最も重要だと感じたことでもあり

「みたいー」と強く願うようになりました。アデレードYWCAで多数のプログラムに参加しながら、英語を学ぶため語学学校にも通っています。プログラムではわからないことも多いのですが、再度説明してもらおうなど多くの方の助けがあつて学ぶことができている。アデレードの皆さんはこのプログラムに参加してみたい、「この人と話すと刺激になるから会ってみたい?」など、英語力を問わずに、学びたい思いを第一に考えてくれます。

それはプログラムにも表れています。例えば、高校生のリーダーシップを育成する「SHF Leads High Conference」では、高校生たちが自分の進路に照らし合わせながら、多彩な場で働く女性ゲストスピーカーの話を真剣に聞き、積極的に質問する姿を見ました。このカンファレンスも彼女たちをエンパワーしているのだと強く感じました。多様な国籍、文化、宗教が混在するこの都市は、とても過ごしやすいです。ここではそれぞれが違っていて当たり前。なによりも自分自身がどう感じるのかが大切とされます。Happyな気持ちか、そうじゃないか。Happyな気持ちになれないときは、なぜそうなのかを考えて、無理にやることはないのです。「自分の感情を大切にしよう」と言われたり、自分自身で感じたりしています。また明日からどんな発見があるか楽しみです。

東京YWCA 藤原聖帆

ご協力ありがとうございます
賛助費
荒井重人 北原恵美 西田和子
花盛静子 江崎啓子 鎌原恵子
坂上信子 布村剛子 川浪希比子
原美左恵 渡辺文子 宮城崇美子
白田治子 伊藤いく代 伊藤いく代
望月和子 安江惠津 渡辺美恵子
京野洋子 阿武 桂 大工原則子
牛島栄子 片山 恵 露木美奈子
浅田和美 岸田美子 木田みほ子
須部道子 太田玲子 神門佳子
河崎純子 辻 加代 松原恵美子
西村律子 堀江宣子 江原美穂子
寺山朝子 深田光代 梶原恵理子
三宅純子 谷池教子 石橋さなえ
諏訪昭子 中橋美鈴 島海百合子
吉田紀子 五味優子 古谷都紀子
旗真紀子 和田奈子 朽木美奈子

小泉進子 鹿野幸枝 富田美樹子
三宅香織 田中蘭子 谷山久美子
山田純子 湯前知子 赤石めぐみ
藤野尚子 安田寛子 高橋須賀子
花盛静子 石川和子 仁木三智子
田中宏子 西田健二 石崎真由美
宋 富子 近藤真由美
野呂幸子 古川進子 富岡美知子
丸田昭江 宮澤玲子 高月三智子
都木恵子 若井史子 山本貴美子
小谷充子 渡辺園子 上村愈巴子
李 初容 比企教子 富田なほみ
岩崎俊夫 常業俊子 大田八千代
宗教者九条の和 山本鉄子 井澤須美子

古川進子 野呂幸子 古谷都紀子
常業俊子 都木恵子 仁木三智子
寺沢京子 渡辺園子 中西トク子
小谷充子 北垣洋子 伊吹由歌子
東洋英和女学院中等部・高等部
特定非営利活動法人東京YWCA福
社会
災害時支援募金
(国内外の災害被災者支援)
北原恵美 江崎啓子 原美左恵
白田治子 辻 加代 古谷都紀子
荒井重人 北原恵美 伊藤いく代
白田治子 辻 加代 古谷都紀子

上田京子 小谷佳子 横山千枝子
湯前知子 宋 富子 富岡美知子
星野輝子 滝澤美知子 榎本みつ枝
(パレンチナYWCA「難民キャンプに
おける子どもたちのためのプログラム支援」
NCC女性委員会世界祈祷日
(熊本地震被災者支援募金)
岸田寛子 肥田信長 藤田純子
加藤英明 仁木三智子
福岡女学院中学校高等学校宗教部
大阪YWCAシャロン千里
仙台YWCA 甲府YWCA
一般財団法人函館YWCA
一般財団法人平塚YWCA
公益財団法人名古屋YWCA
公益財団法人京都YWCA
公益財団法人神戸YWCA
東日本大震災被災者支援募金

北原恵美 江崎啓子 白田治子
依田良子 安江惠津 井上裕美
田村セツ 太田玲子 谷谷都紀子
辻 加代 堀江宣子 谷山久美子
藤野尚子 川上静子 仁木三智子
常業俊子 野呂幸子 山本貴美子
宮澤玲子 上村愈巴子
鈴木容子 都木恵子 小野小夜子
吉村千恵 小谷充子 中西トク子
北垣洋子 清水威秀 三崎たつ子
正木春菜 濃畑堅三郎 多喜百合子
こひつじ保育園
甲府YWCA
匿名(ソフバンク株式会社)「かさ
して募金」より
(2016年6月16日~8月15日現在
敬称略)

発行所 公益財団法人日本YWCA 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11 東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121 Fax.03・3292・6122 office-japan@ywca.or.jp www.ywca.or.jp

編集発行人 石井摩耶子/偶数月1日発行

旬な情報発信しています | メルマガ登録 y-net@ywca.or.jp | にお名前を送ってください / フェイスブック www.facebook.com/YWCAJapan

メールにてご意見・ご感想をお寄せください。今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。 office-japan@ywca.or.jp

無断での複写・転用・転載はご遠慮ください。

呉 YWCA 地域にも継承したい みんなの「特製肉まん」

30年ほど前、バザーの目玉になるようなメニューを求めていたところ、知人の台湾の方から教えていただいたのが「特製肉まん」でした。たちまちバザーの人気メニューとなり、「肉まんを作るよ」と呼びかけると、みんなが集まってワイワイと作ったものです。最近では会員の高齢化により、肉まん作りが思うようになくなりました。この味が途絶えるかと危ぶまれる一方で、「料理教室を開いて地域のの人に伝えよう」という提案もあり、また新しい物語が生まれそうです。



生地が発酵具合、具の混ぜ加減、包み方など、会員たちの口伝承で守られてきたレシピを未来へ伝えられるよう努力しています



東京 YWCA 福祉会 障がいをもつ方たちと共に働く カフェの「日替わり丼」

長年障がい児支援や療育活動に取り組んできた東京YWCA板橋センターに、この夏、地域の方の遺贈を受けて「つくい館」が完成。次いで9月、館内に「カフェJOY」がオープンしました。ここは、障がいをもつ方たちが働くことを通して持てる力を伸ばし、人と働く喜びを感じられるようにとの願いが込められた場所です。メニューは毎日いろいろな味が楽しめる「日替わり丼」とバザーで親しまれてきた「カレーライス」。地域の人々の温かい集いの場となりそうです。



日替わり丼の一例。炒り卵と肉そぼろ、緑の野菜の色鮮やかな「三色丼」。スープとサラダが付いています

弘前 YWCA 平和に想いをはせて味わう 食糧難時代の「すいとん」



大切なのは「美味しさ」よりも「あの時代」を思うこと。滋味に富んだ一杯が体に染み入ります。

弘前YWCAは会員数10人の小規模な組織です。創立から18年、平和を求めてさまざま活動に取り組んできました。毎年8月に開く「平和を考える拡大集会」では、核や憲法をテーマに講師を招いて地域のひとと学びの時を持ちます。今年「大間原発訴訟の会」代表の竹田とし子さんから、反原発の活動について聞き、平和への祈りを合わせました。この集会には「すいとん」が欠かせません。戦後の食糧難の頃を覚えて平和に思いをはせながらみんなでいただきます。

広島 YWCA 地域の子どもを支援する 「カレーパーティ」

「ロクナナヤーン ワカクサ」は地域の子どもの成長を見守りながら、見えない貧困や孤立状態にある親子を見出し、支援することを目的にこの春スタートしたプロジェクト。子ども食堂の試みとして月に一度「カレーパーティ」を開き、みんなで食卓を囲む楽しさや片付けなどお手伝いを体験してもらっています。一方で、子どもたちへの支援のあり方について専門家に学ぶ講座を設けるなど、ボランティアの養成に努めています。子ども同士で誘い合って、気軽に集える場となれば嬉しいです。



食べやすい甘口カレーに夏野菜をトッピング。近所の精肉店から安価で提供された広島のブランド豚を使用しました

湘南 YWCA 親子みんなでいただく 絆を深める「手作りおやつ」

子育て支援「ほっとスペースなのはな」は、2～3歳の幼児と親を対象に月2回、手作りのおやつをいただきながら、ほっとするひとときを持っています。お月見の団子やクリスマスのカップケーキなど、季節の行事食を大切に取り入れながら、手軽にできるおやつの紹介や、年に数回はお料理会もしています。手作りしたおやつをみんなで楽しくいただくことで、自然に信頼関係が深められるように感じます。毎年夏休みに開く同窓会でも、大きくなった子どもたちとおやつを味わいます。そんなこだわりの活動も20年近くになりました。



お花模様の切り口に子供たちは喜んだり、驚いたり。今日のおやつは動物型のクッキー。

丸めたり、巻いたり、子どもと一緒に料理を作ることもあります。この日は飾り寿司を作りました



横浜 YWCA 働く力を支える 「タイのグリーンカレー」



本場タイの食材や香料にこだわっています。周辺のオフィスで働く人たちにも好評です

「Yカフェ パーショ」は、生きづらさ、働きづらさを抱えて家に閉じこもりがちな女性が、安心して集い、働く力をつける場です。会員や職員、ボランティアが彼女たち実習生を見守っています。最初は戸惑う実習生も、接客をするうちに顔見知りが増えて話せるようになり、「自分の居場所」と捉えてくれます。ここでは賄いがなく休憩時間にカフェを利用する実習生もいます。人気は「タイのグリーンカレー」。タイ王宮の料理人に学んだという人から習った本格派。独特の辛さがクセになるそうです。そんな実習生たちも、自信をつけて巣立っていきます。



種

畑で穀物を刈り入れるとき、一束畑に忘れても、取りに戻つてはならない。それは寄留者、孤児、寡婦のものとしなさい。こうしてあなたの手の業すべてについて、あなたの神、主はあなたを祝福される

(申命記24章19節)

この言葉は、エジプトで奴隷状態にあった人びとを解放して、神が約束した豊かな土地に導いたと伝えられるモーセが、自分の同胞に命じた言葉として旧約聖書の中に書かれています。人間として固有の希望や夢を持つ人生を生きることを奪われていた人びとは、モーセを通じて神に出会い、土地を手に入れ、自由で自立的な歩みを始めようとした。そのときにモーセは彼らに命じたのです。「寄留者、孤児、寡婦」は当時の社会システム、支配と庇護の上に成り立つ家長制の枠組みから排除された人たちです。庇護者を持たないこれらの人たちは社会の中で軽んじられ、その生存はしばしば危機に瀕するものでありました。聖書はこれらの人たちのために、収穫の一部を分かち合うことを、「神」という自分の生存を確かなものにしてくれた存在からの命令とし、確かな実効性を持たせようとした。人として生きることは分かち合うこと、社会をつくることは分かち合うこと、そのように聖書は考えているのです。現代の社会に生きる私たちも聖書に学ぶべきことが多いのではないのでしょうか。

柳下明子
日本キリスト教団武蔵野緑教会牧師
日本聖書神学校教授

「ひろしまを考える旅 2016」 報告

ひろしまから福島へ、そして世界へ



8月9日～11日（オプションツアーは12日まで）、広島YWCAと協働して「ひろしまを考える旅」を実施。アジア太平洋への侵略戦争を止められなかった反省に立ち始まったこの旅も、今年で45年目を迎える。広島平和記念資料館見学、4コースに分かれてのフィールドワーク、被爆証言、碑めぐりの各プログラムに、中学1年生からシニア層までの多世代と、中国・韓国YWCAからのゲストなど67人が参加した。今年のテーマは「ひろしまから福島へ、そして世界へ」。71年前のヒロシマ・ナガサキ、5年前の福島から学び、核なき平和をアジアの仲間とつくりたい、そんな思いが溢れる旅となった。プログラム中、10～20代の参加者が書いた「想いを伝える」から一部を抜粋して紹介します。

ひろしまを考える委員会 委員長 津戸真弓



原爆の記憶をたどるフィールドワーク

自分が住む国で、71年前にこれほどの恐ろしい事実があったというのは本当に悲しいことであるし、繰り返してはならないこと。しかし、戦後そう思い続けてきたはずの日本で、5年前原発事故は起きてしまいました。今まであまり原発のことについて理解していなかった私ですが、福島の方のお話を聞いた今では、どうして現在も原発があるのだろうという思いでなりません。私は「忘れること」が一番怖いです。

Y・M

さまざまな背景を持つ参加者の考えに触れられたことは、このプログラムの大きな魅力です。一人で資料館を訪れたり、書籍で読み取ったりす



打ち解けた、盛り上がった交流会

るだけではたどり着けなかったでしょう。人はどうしても怠けてしまう生きものです。自分がある「今ここ」の暮らしが「社会」「政治」「平和」など大きなことにつながっているとわかっていても、日々のことばかりに目が向いてしまいがちです。このようなチャンスはいただいたり、チャンスをつくっていくことで、日々をどのように過ごすかという選択が見極められていくように感じました。

I・C



広島平和記念資料館にて

この広島で韓国・朝鮮の人たちもたくさん亡くなっていたという事実を知りませんでした。基本的には、私たちは学校で教えてもらったことを

事実として受け取ります。それが当たり前になっている今、71年前のことを感じることは難しいですが、知らされていない、知らないというのが一番怖いことであると、この旅を通じてわかりました。

I・M

話をしてくださった方の「まだ若いあなたたちに託すね」という言葉を忘れることができません。戦争を体験していない私に何ができるのか？皆が私の話を聞いてくれるのかわかりませんが、何か行動を起こさないと何も変わりません。なので私はSNSや家族に伝え広めていこうと思います。

Y・A



真剣に議論を交わしたワークショップ

核のない世界をめざして共に歩もう

日韓ユース・カンファレンス2016報告



古里原発を臨む海岸で近隣住民のお話を聞いた

日韓ユース・カンファレンスは、日本と韓国の若い世代のリーダーシップ育成と顔の見える交流を通じて、東北アジアで草の根の平和構築を目指すプログラム。1993年に始まり、17回目となる今年は8月1日～4日、韓国・釜山にて、「核のない世界へのエネルギー転換」をテーマに実施した。韓国から20人、日本から14人の参加者は、古里（ゴリ）原子力発電所や新規建設中の新古里5、6号基周辺を訪れて地域住民やNGOメンバーにお話を聞き、また、持続可能な循環型農業を追求する「ミントレ・コミュニティ」では、エネルギーの大量生産・大量消費とは異なる多くの取り組みを見聞した。参加者は自分たちに何ができるかを考え語り合い、最終日には、今後の行動指標としてのアクション・プランを採択した。

見て触れて感じて 問題意識が持てた

プログラムに参加するまで、原発問題を身近に感じる事ができず、いざしかし今回、特にゴリ原発周辺に住む人々の話を聞くことで、私たちが当たり前のように使っている電力は、近隣住民に危険を伴わせることで得ているのだと改めて実感できた。問題意識を持つために大切なことは、実際に自分の目で見て、触れて、感じる事だと思ふ。この経験によって得たものを、これからも活かしていきたい。

五十嵐希

リスクを理解し、 未来を考えよう

「日韓両国が原発保有のリスクを負う運命共同体である」と言われた時、ハッとさせられました。福島第一原発の事故を起こしてもなお、原発再稼働を押し進める日本と、10基もの原発を一カ所に集中的に建設しようとしている韓国。両国が現実のリスクを理解し、未来に何を残したいのか、考える機会が本当に必要だと思ったので、韓国のユースと共に建設的・率直な意見交換ができて嬉しかったです。

下村ゆり

「恨之碑」を語って 心を通わせた

朝の集いで「恨之碑」(※)についてスピーチしました。その中で、沖縄も加害者である事実を受け止め、忘れずにいること、次の世代にも伝えていくことをアピールしました。そして日韓



新古里原発5・6号基に反対するアピールを行った

語り合うことで解決策を 提案できた

最も印象に残ったのは、韓国と日本の同年代の方々と原発に関して議論して、解決策を話し合えたことです。これまで原発にあまり関心がありませんでしたが、お互いに意見を交換することで、自分一人では思ってもよらないような解決策を出し合えたことは大きな収穫でした。原発問題に関して関心を持てるようになったこのプログラムを大切にしていきたいです。

河野めぐみ



グループディスカッションでは原発問題について語り合った

両国が互いに手を取り共に平和を創っていくと呼びかけました。その後、韓国の青年に「考えが変わった、ありがとう」と言ってもらえたことが、とても嬉しかったです。この繋がりを大事にしていきたいです。

沖縄YWCA 比嘉愛莉

* この事業は電通育英会の助成を受けています。

※ 「恨之碑」 沖縄戦時に朝鮮半島から強制連行されて犠牲になった軍夫や「慰安婦」らを慰霊するモニュメント。沖縄と韓国慶尚北道に建っている。「恨」は「恨み」ではなく、辛い過去を忘れずに心に刻むという意味。



フレコンバッグが集積された仮置き場 (2014年)

放射線に汚染された物質が日常の中に置かれている。福島市では、地震で損壊した建物が修復され、復興イベントが目白押しです。その一方で、市内に住む女性はこう語っています。「原発の過酷な事故とその後の放射能による被災がなきことにされようとしており、(福島

YWCAの東日本大震災被災者支援活動

com7300

私たちが支え続ける理由

東日本大震災と東京電力福島原子力発電所事故から5年半、「復興」の声が勇ましく響いている。しかし、福島では今も放射能汚染による被害が続いている。YWCAはあの日から20年間、被災者を支え、一緒に歩み続けることを決意し、さまざまに活動している。

では) 個々がちりぢりにされているように感じます。

この声を示すように、一人ひとりの生活は取り残されたまま、不安は拭いきれず未来への希望を描ききれないでいます。

原発事故によって拡散された放射性物質は「除染」という作業によって土と共にはぎ取られ、フレコンバッグ(耐久型の大形土のう)に詰められ、多くの家庭では今も自宅の敷地の隅に置かれたままになっています。「仮置き場」ができるまで、町会単位で暫定的に設置された「仮置き場」には、集積されたフレコンバッグが30センチの土で囲われ、更に分厚いシートで覆われ、平らな山のように存在しています。これは中間貯蔵施設ができるまで撤去されることはありません。

福島市内の住宅の除染作業は今年の3月までに終了しましたが、地域のどこかに放射能による汚染物質の「仮置き場」を決めなければ、通学路や側溝の除染作業ができません。記憶の風化や復興支援事業の滞りも見られる中、被災者の方々にさらに寄り添う支援が求められています。

被災した女性と子どもたちに20年間寄り添い続ける

日本YWCAは、東日本大震災発生以降、



「保養プログラム」で川あそび

横浜、名古屋、神戸にある3軒の「セカンドハウス」

セカンドハウス

放射線量の高い地域に住む親子が、野外で思う存分に遊び、心身ともにリフレッシュするためのプログラム。各地のYWCAが、子どもたちの長期休暇に合わせて春、夏、冬に行います。2015年度は322名が参加。今年度も函館、東京、静岡、名古屋、京都、大阪、熊本、福岡などの9カ所で実施予定です。

保養プログラム

特に東京電力福島第一原発の事故によって被災した女性と子どもたちの心身を守り、課題解決の力となれたらと願い、被災者支援活動を通じてきました。あの日生まれた子どもたちが20歳になるまで寄り添って活動していくことと決意し、com7300委員会を立ち上げ、被災者支援事業を実施しています。comはラテン語で「ともに」、「7300」は365日×20年間の日数を意味しています。現在、次の3つを柱として支援活動を行っています。

活動スペース「カーロくしま」

福島市内にある活動スペース「カーロくしま」は、女性と子どもたちがいつでも気軽に立ち寄ることができる場です。また、講座や集会を通して情報を共有して、地域の女性たちの自主的な活動を応援し、エンパワーする場でもあります。2015年度はのべ883名が利用しました。

私たちは今後も被災者に寄り添い、支援活動を続けていきます。

com7300委員会

東日本大震災被災者支援募金

皆様のご協力を心よりお願い申し上げます。

●銀行振込

三井住友銀行 飯田橋支店 普通預金
口座番号1198743

(口座名義) 公益財団法人日本YWCA

ヨウシキライブツノホウワクブリンシエ

メールにて①振込日 ②金額

③お名前 ④ご住所 ⑤com7300

とお知らせください。

●郵便振替

00170-7-23723

(加入者名) 公益財団法人日本YWCA

振替用紙通信欄に①お名前 ②ご住所

③電話番号④com7300 とご記入下さい

※当法人へのご寄付は、税額控除の対象となります。



東日本大震災被災者支援保養プログラム



北海道の海と大地を親子で満喫

みんな夢中になってカニを探して釣り上げました



放射能を気にせずにおもいきり外で遊ぼう!

函館YWCAでは6回目となる保養プログラムを、7月29日から8月1日まで、3泊4日で開催しました。

今年は子どもの対象年齢を小学3年生までとしたこともあり、申し込みが減ると予想されましたが、結果的に35組の応募がありました。

当日、7組19名の参加者は、開通したばかりの北海道新幹線で函館に到着。北の大地で過ごす夏休みがスタートしました。保養プログラムは「外遊び」が目的なので、何よりの心配はお天気です。予報では悪天候でしたが、私たちの頭上だけ見事にはずれてくれて、期間中は外遊びに最適な気候でした。

子どもだけでなく大人も魅了する、恒例の磯遊び「カニ釣り」は、函館ならではのプログラム。最初は親から離れなかった子どもがここでは夢中になって岩の中を覗き込む姿が見られます。また、お付き合いのあるファームの方の協力で、羊にエサをやったり、刈った毛を洗ってふわふわの羊毛を作ったりと、初めての体験もさせてもらいました。保護者の方たちにも函館を楽しんでいただくため、子どもと離れて自由に観光して巡る時間とっています。子どもばかりでなく、大人にとっての保養も大切だと感じます。

子どもの遊び相手には学生のボランティアが欠かせません。事前に研修会を開いて「福島の現実」を知ってもらうほか、遊び方も考えてもら



います。今年は男子大学生が大活躍! 周囲から「兄弟みたい」と言われるほどでした。

外遊びを満喫する子どもの様子を見て、ある保護者が「私から離れてあんなに楽しそうに遊んでいる子どもの姿に感動しました」と語っていました。

最終日に駅でお見送りをしたとき、一人の子どもの「時間が戻ればいいのに」というつぶやきが、おもいきり外で遊べた4日間を物語る感想だと思います。

函館YWCA

北の大地実行委員長 深谷令子

強い意志の共有と地域の協力が欠かせない

私たちは持続的な支援活動のために、さまざまな試みをしている。たとえば、地元の新聞に掲載を依頼して寄付を呼びかけて、広域的に宣伝している。資金集めのチャリティーライブでは、明確な予算目標を掲げ、地元の企業等に広告協賛を依頼するなどしてゴールを目指した。必要な支出についての工夫もある。子どもが楽しめる施設にプログラムの趣旨を伝えて、入場料等の無料化や減額をお願いするのであ

る。今回はミニ遊園地、温泉入浴料、貸切バスの料金等で協力をいただいた。持続可能にすることを最優先に考えると、勇気をもって変えたり、地域に協力をお願いすることが必要となる。高いハードルであっても、福島の親子を思うYWCAのハートがあり、そこに賛同してくださる地域の方々の協力があってこそ、続けることができる。

函館YWCA総幹事 石山千賀子